

『南山神学』44号(2021年3月) pp. 1-33.

「強盗会議」

—カルケドン公会議への幸運な迂回—

ハンス ユーゲン・マルクス

449年8月中に、エフェソスで開催された二回目の帝国教会会議について、使節ヒラリウスの報告を受けた教皇レオ1世は、同年10月13日、コンスタンティノポリスの聖職者と住民に送った書簡で、参加した司教が首都司教フラヴィアノスの罷免宣告書への署名を強制されたことを非難した¹。また、同日、皇帝テオドシオス2世に送った書簡で、強制を告発するとともに、自分のもとに集まっている司教たちの名においても、再審のためイタリアで西方の司教も容易に参加できる公会議の開催を要請した²。拒否を貫いていた皇帝は、450年7月28日、落馬事故で亡くなった。男子帝位継承権者がいなかったため、姉プルケリアが跡を継ぎ、7・8歳上の軍人マルキアノスと結婚した。さっそく後者の名前で公会議召集に前向きな意向を伝える書簡がレオ1世に送られた³。451年7月20日付でレオ1世は帝妃プルケリアに書簡を送り、平穏な審議が保障されるよう援助を要請し、前回エフェソスで開かれた会議では「裁判ではなく強盗が行われた」と戒めた⁴。そのためエフェソスで開かれた二回目の帝国教会会議は「強盗会議」の名で知られるようになった。

すでにテリヴォル・ジェレンドが指摘したように、「強盗会議」に対するレオ1世の否定的な評価は、主として、教皇使節の度重なる要請に反して、自分の

¹ ACO II, 4, p. 21:12-22:13.

² ACO II, 4, p. 19:13-21:9.

³ ACO II, 3, 1, p. 17:18-28.

⁴ ACO II, 4, p. 51:4-5.

書簡が会議で読み上げられなかったことに起因していたのだろう⁵。ところが、ウィルヘルム・デ・フリスによれば、とりわけ帝国首都の司教フラヴィアノスに宛てた書簡が朗読されなかったことは、キリストの秘義について東方で進められていた思弁にあまりにも無理解の姿勢を示していた教皇への思いやりさえ伺わせる。もしも議長が教皇使節の要請のとおり「レオの書簡を朗読させたならば、たぶん動乱が起こったのだろう」⁶。

また、暴行などについては、教皇使節ヒラリウスは完全に信用できる証人でもない。「なぜなら、エフェソスにおける自らのかなりみじめな失敗を弁明しなければならなかったからである」⁷。さらに、カルケドン公会議の席で己が被った暴力を訴えた司教たちもフラヴィアノスを始め数名の司教に罷免などを告げる文書に署名したばかりであり、この件を弁解すべき立場にあったので、「やはり誇張したことを計算に入れなければならないだろう」⁸。したがって、449年8月中に開催されていた帝国教会会議を『強盗会議』として特徴づけることも、フラヴィアノスに宛てた自らの書簡が無視されたことへのレオ1世の不満の故に理解できるものの、誇張であった⁹とデ・フリスは結論づける。

ここでは伝統的な名称を保ちつつも、強盗会議は、直接にカルケドン公会議の開催に繋がったことで、キリスト論の歴史において重要な、しかも建設的な地位を占めていることを明らかにしたい。すでに論じたように¹⁰、431年に開催されたエフェソス公会議は賢明な調停を要する決議を残した。調停への最初の試みは433年の春、アレクサンドリアの司教キュリロスとアンティオケイアの司教ヨアンネスとの間に結ばれた合同であった¹¹。合同締結の翌年、レランヌの

⁵ T. JALAND, *The Life and Times of St. Leo the Great*, London 1941, 252.

⁶ W. DE VRIES, "Das Konzil von Ephesus 449, eine 'Räubersynode'?", *OrChrP* 41 (1975) 367.

⁷ *Ibid.* 385.

⁸ *Ibid.* 390.

⁹ *Ibid.* 398.

¹⁰ 拙論「『神の母』—エフェソス公会議(431年)の決議と調停への最初の試み—」『南山神学』(第39号・2016年)225-281頁。

¹¹ 同書269-279頁参照。

ヴィンケンティウスは『忠言書』を著し¹²、それまでの代表的な異端とこれに対応する教会の教えを紹介したのち、最後に、もっぱらカッシアヌスのお粗末な審査報告に依拠しながら¹³、ネストリオスを取り上げるが、エフェソス公会議、ましてや 433 年の春に結ばれた合同にはまったく触れていない¹⁴。これは当時の東西間におけるコミュニケーション不足の典型とってよいであろう。レオ 1 世はフラヴィアヌスに宛てた書簡では、キリストの秘義について東方で進められていた思弁に十分な理解を示さなかったものの、相手に西方の伝統的なキリスト論を解き明かしたことで、東西間のコミュニケーション改善に貢献したことは否めない。実際に、書簡はカルケドン公会議で採択された教理に十分反映されており、しかも中心的な一か所はそのまま引用されている。そういった意味においても、書簡執筆のきっかけとなった強盗会議はカルケドン公会議への迂回ではあったが、まさしく幸運な迂回でもあった。

カルケドン公会議自体については別の機会で論じたい。今回は、まず強盗会議の開催に至った経緯をたどりたい。多岐にわたる追跡になるので、本稿のスペースの半分を占めることになる。次には、レオ 1 世の怒りを招いた第一回の総会に焦点を合わせたうえで、その後に行われた審議・決議を紹介したい。最後に第四回のエキュメニカル公会議がカルケドンを会場に開催されたデータを整理したい。

1. 開催に至った経緯

キュリロスがアンティオケイア伝承の大家が排斥されることへの取り組みをあきらめた後¹⁵、しばらくアレクサンドリアとアンティオケイアの間には平穏な情勢が続いた。しかし、448 年 2 月 17 日に発行され、4 月 18 日に再確認された勅令で新たな抗争が始まった。

¹² VINCENTIUS, *Commonitorium* (CChr.SL 64, 147-195).

¹³ 上掲拙論「エフェソス公会議」250-251 頁参照。

¹⁴ *Commonitorium* 12, 9-13; 16, 2 (CChr.SL 64, 163: 34-56; 169: 8-10).

¹⁵ 拙論「三章論争へのプレリュード—エフェソス公会議後の新たな抗争の第一期—」『南山神学』(第 40 号・2017 年) 33-34 頁参照。

1. 1. ティルスの司教エイレナイオスの罷免

勅令は、ネストリオス派弾圧の強化とティルスの司教エイレナイオスの罷免を公布するものであった¹⁶。罷免の理由として、再婚者に高位聖職への就任を禁じる教会法が引き合いに出されている。しかし、キュロスの司教テオドレトスも示唆するように、本当の理由は見せしめであったのだろう¹⁷。

エイレナイオスはネストリオスに同調する宮廷高官として、皇帝がわざわざ力説したとおり¹⁸、個人の資格でネストリオスに付き添ってエフェソス公会議に出席していたが、ついにはネストリオスと同様に流罪に処せられてしまった。ところが、フェニキアの司教たちによるティルスの司教への選任には、隣接するパレスチナに加えて、黒海南岸に沿うポントスの司教たちも賛成を表明していたので、446年7月中亡くなった帝国首都の司教プロクロスの下承も得て、442年と443年の間にはアンティオケイアの司教になったドムノスの按手によって、エイレナイオスはティルスの司教に叙階されるに至った¹⁹。

プロクロスの死亡とドムノスの司教への就任の年代から明らかなおと、エイレナイオスの叙階と罷免の間はわずか数年しか経っていない。特にアンティオケイアでは、罷免をはじめ勅令全般に対する猛烈な反対が起り、ドムノスが司る主日典礼の途中「勅令を捨てよ。勅令にのっとって信じる人は誰もいない」と唱えるシュプレヒコールが上がるほどであった²⁰。地元の聖職者キュリア

¹⁶ ACOI, 1, 4, p. 66:5-35; 67:6-17. ネストリオス派に加えて、404年にアンティオケイアの司教になり、多くの反対に遭ったポルフェリオスの支持者も弾劾。

¹⁷ SC 111, 40: 20-26. テオドレトスのこれまでの関りについては、上掲拙論「エフェソス公会議」257, 277-278頁、「三章論争」31頁参照。

¹⁸ 上掲拙論「エフェソス公会議」258頁参照。

¹⁹ SC 111, 40:12-21; 42:1-8.

²⁰ 以下に紹介する情報の一部については、一次史料はシリア語で書かれた一つの写本に限られている。断片的な部分があるものの、とりわけ、449年8月8日の第一回総会の後に行われた会議の議事録が含まれており、1917年、ドイツ語への対訳と共に出版された(J. FLEMMING, *Akten der Ephesinischen Synode vom Jahre 449. Syrisch mit Georg Hoffmanns deutscher Übersetzung und seinen Anmerkungen*, Göttingen 1917)。以下の出典を FLEMMING とし、ドイツ語対訳の頁・行数を記す。ここでは、FLEMMING 59:5-7.

コスが強盗会議に提出した報告書によれば、当初エイレナイオスの罷免の実施に反対していたドムノスは、その不当を訴えるべくアンティオケイアで頻繁に説教ができるよう、テオドレトスに住居を提供していた²¹。

1. 2. アレクサンドリアとアンティオケイアとの新たな対立

勅令が出た年内にアンティオケイアの修道者テオドシオスは、テオドレトスの説教中に造られたメモを携えて、数名の仲間と一緒にアレクサンドリアに出かけた。彼らの情報により地元の修道者の間に広がった動揺に応じて²²、444年以來当地の司教を務めるディオスコロスが初めてドムノスに書簡を送り²³、二つの問題を提起した。

一つは、アンティオケイアの教会でテオドレトスに説教の場が与えられていたことである。特に厳しく非難されているのは、テオドレトスがキリストを二つに分ける発言を繰り返した際に、祭服を着用したまま臨席したドムノスが黙っていたことである²⁴。もう一つの問題は、罷免されたエイレナイオスに代わるティルスの司教がいまもって決まっていないことである²⁵。書簡は二つの「要請」²⁶で締めくくられる。一つは、テオドレトスのように正統信仰を貶す者に説教の場を与えないことであり、もう一つは、ティルスの司教を「直ちに叙階してください」²⁷ということである。

特に第二の要請は、先方の管轄への極めて露骨な干渉だったにもかかわらず、448年9月8日、フォティオスがティルスの司教に叙階された²⁸。ディオスコロスへの返書は、叙階について触れていないので、その前に書かれたのだろう²⁹。

²¹ FLEMMING 115:38-117:5.

²² FLEMMING 131:32-41.

²³ FLEMMING 133:23-139:25.

²⁴ FLEMMING 135:26-30.

²⁵ FLEMMING 137:46-139:7.

²⁶ FLEMMING 139:11.

²⁷ FLEMMING 139:16.

²⁸ FLEMMING 123:14-16.

²⁹ FLEMMING 139:26-141:13.

同時に、おそらくドムノスの要請に応じて³⁰、テオドレトスはディオスコロスに自分の信仰告白を送っている³¹。

返書の喪失した部分に続いて、ドムノスはアンティオケイアからアレクサンドリアに来ている修道者たちについて「おしゃべりを黙らせ、その誹謗を信じた者を嘘ばかりの話を傾聴しないよう戒めなさい」と頼んだうえで³²、ティルスの司教に関わる譲歩をディオスコロスの書簡を自分に持参してきた使節を通じて知らせる、と返書を締めくくる³³。

これを受けたディオスコロスの返書³⁴から明らかなとおり、使節を通じて、初めて送った己自身の書簡がアンティオケイアで開かれるべき会合の席で朗読されることも要請されていた³⁵。朗読されなかったことこそ、アレクサンドリアの諸修道院を立ち回るアンティオケイア出身の修道者たちのため地元に広がりつつある騒ぎの要因の一つだ、とディオスコロスは先方を戒める³⁶。

これに対する返書をもって今回の文通は終わる³⁷。これまで確認できた文通ではキュリロスの十二破門条項³⁸が全然話題になっていない。しかし、返書の主題は、文面で十二破門条項の承認を表明することがドムノスに要請された、ということである。その要請は、喪失した部分でなされていたのかもしれない。あるいはディオスコロスからドムノスに送られた初めての書簡の朗読に関わる要請と同様に使節を通じて口頭で寄せられたのかもしれない。

ドムノスは真っ先に 433 年の春に合同を实らせた妥協を引き合いに出している。オリエンズ州の司教たちが十二破門条項の受理を口頭でキュリロスに知ら

³⁰ FLEMMING 139:38-46.

³¹ SC 98, 204:18-218:27.

³² FLEMMING 141:4-6.

³³ FLEMMING 141:6-11.

³⁴ FLEMMING 141:16-143:43.

³⁵ FLEMMING 143:37-38. 後で強盗会議に提出され、ドムノスを相手取る告訴状もこのことを前提としている (FLEMMING 89:38-43)。

³⁶ FLEMMING 143:31-42.

³⁷ FLEMMING 145:15-147:34.

³⁸ 上掲拙論「エフェソス公会議」252-254.259.269.274 頁参照。

せたことを受けて、キュロスも先方に送った書簡で破門条項については言及せず、以前アンティオケイアから送られていた信仰告白を受理した。「この結果、地球における東西の諸教会は、神の恵みによって、今までずっと神において協調している」³⁹。だから「それ以前には平和を乱すこともあったので、破門条項をそのままにしておくように懇請する」⁴⁰。そのように訴えたうえで、ドムノスは返書をこう締めくくる。「先に送ってくださった書簡を公表しなかったのは、大火災を引き起こさないためであった」⁴¹。

1. 3. キュロスの司教テオドレトスへの対立の集中化

以上のようにアレクサンドリアとアンティオケイアとの間の緊張が深まる中、テオドレトスはアンティオケイア伝承の立場から、キリストにおいて神の本性と人間の本性との区別を認める「正統派」の代表者と実質的に神の本性しか認めないキリスト単性論派の代表者が登場する対話篇を著した⁴²。乞食という意味の『エラニステス』を題に選んだのは、キリスト単性論派が自説を裏付けるため、まさしく乞食のように、ありとあらゆる異端を拾い集めている、と皮肉るためである。

アンティオケイアで修道者たちがテオドレトスの説教中に作ったメモによれば、復活したイエスの弟子たちへの出現（ヨハ 20:26-29 参照）を手掛かりに、説教者はキリストにおける神と人との区別を簡潔にこう説いた。「トマスは、復活した方に触れ、復活させた方を礼拝した」⁴³。ただちにアンティオケイアでは、その伝承の大家の名前を繰り返すシュプレヒコールが上がった。

³⁹ FLEMMING 145:32-33.

⁴⁰ FLEMMING 147:10.11-12.

⁴¹ FLEMMING 147:32-33.

⁴² G.H. ETTLINGER (ed.), *Theodoret of Cyrus. Eranistes*, Oxford 1975.

⁴³ FLEMMING 131:50-133:1.

「これこそ使徒たちの信仰，正統性の信仰，ディオドロスとテオドロスの信仰だ。われわれもディオドロスとテオドロスのように信じる。勅令にのって信じる者は誰もいない。」⁴⁴

引き続いて，帝国首都でキリスト単性論派の本拠地であった二つの修道院の院長がシュプレヒコールの対象となった。「教会の敵を追い払え，異端者を追い払え，神を苦しませる者を追い払え。エウテュケスとマクシモスを追い払え」⁴⁵。後者が正確にわからない理由で特に憎まれていたことは，シュプレヒコールの続きから明らかである。「願わくは，マクシモスの修道院はすぐにも焼失するように。彼もこちらを去り，あちらへ行くように。悪魔であった。人間ではなかった」⁴⁶。最初に名指しされたエウテュケスは強盗会議開催の直接原因となる。

1. 4. エウテュケスの裁判

410 年以來，エウテュケスは 300 名以上もの修道者を擁する郊外の修道院を司り，エフェソス公会議中首都内でネストリオスの追放を叫ぶ大衆デモに加わっていた高名な修道院長ダルマティオス⁴⁷が 436 年と 440 年の間に亡くなってからは，エウテュケスこそ「正統な修道者のリーダー」という評判が高まる一方であった。また，侍従長を務めるクリュサフィオスの代父であったので，宮廷内にも相当な影響を發揮しえた。

彼によるアンティオケイア伝承大家の批判が激しさを増す中，ドムノスは皇帝にエウテュケスをアポリナリオスの異端で訴えた⁴⁸。これは極端な告発であったのだろうが⁴⁹，おそらくそれを機に，エウテュケスはレオ 1 世に東方にお

⁴⁴ FLEMMING 133:2-4.

⁴⁵ FLEMMING 133:5-7.

⁴⁶ FLEMMING 133:8-9.

⁴⁷ 上掲拙論「エフェソス公会議」267 頁参照。

⁴⁸ 断章しか残っていない (CChr.SL 90A, 244:2-245:40)。

⁴⁹ W. DE VRIES op.cit. 371.

けるネストリオス派の回生を知らせた。448年7月の返書で、より詳細な情報
 が得られるまでは判断を保留したい旨の返書がエウテュケスに送られた⁵⁰。

ついにエウテュケスを公の場で相手取ったのは、一般信徒として論争当初から、
 ネストリオスに立ち向かい、448年ドリュラインの司教になったエウセビ
 オスであった⁵¹。エフェソス公会議以来、エウテュケスと友好関係にあったが、
 数回も極論訂正の願いに応じなかったのが、エウセビオスは438年11月8日
 の首都駐在司教会議に告訴状を提出した⁵²。被告の人脈を警戒していた議長で、
 帝国首都の司教フラヴィアノスは二回も原告に告訴の撤回を打診したが⁵³、原
 告が審理に拘ったので11月12日に告訴は受理された⁵⁴。

と同時に審理の際に判断基準として参照しなければならない二つの資料が確
 認された。一つは、430年の初めにキュリロスがネストリオスに送った第二の
 書簡であり⁵⁵、もう一つは、3年後のアンティオケイアとの和解を歓迎した書簡
 である⁵⁶。それらの朗読の後、各司教に信仰告白が要請された。最初に立ったフ
 ラヴィアノスが読み上げた信仰告白の中心的な個所だけを見よう。「私たちは、
 受肉の後には、一つのヒュポスタシスと一つのプロソポンにおいて二つの本性
 からなっているひとりのキリスト、ひとりの子、ひとりの主を告白する」⁵⁷。

⁵⁰ ACO II, 4, p. 3:1-10.

⁵¹ 上掲拙論「エフェソス公会議」240頁参照。

⁵² ACO II, 1, 1, p. 100:18-101:5.18-30. ラテン語訳がある (ACO II, 3, 1, p. 78:4-21; 79:2-15)。以下、括弧の中で最初に挙げる出典は、第二コンスタンティノポリス公会議 (553年)の間、およびその前後にも当地に滞在していたローマの助祭ルスティクスがエフェソス・カルケドン両公会議資料の複数の原文写本を参照しながら、既存のラテン語訳を改善したもので、565年頃完成した。括弧の中で最初に挙げるのはルスティクスの訳であり、後に挙げる出典はヴァティカンやノヴァラなどの資料集にある。原告にとって告訴に伴う危険などについては、G. MAY, "Das Lehrverfahren gegen Eutyches im Jahr 448," AHC 21 (1989) 1-61 参照。

⁵³ ACO II, 1, 1, p. 102:1-5. 14-17 (ACO II, 3, 1, p. 79:17-20; 80:1-4).

⁵⁴ ACO II, 1, 1, p. 102:22-25 (ACO II, 3, 1, p. 80:9-11).

⁵⁵ 上掲拙論「エフェソス公会議」244-246頁参照。

⁵⁶ 同書 272-276頁参照。

⁵⁷ ACO II, 1, 1, p. 114:8-10 (ACO II, 3, 1, p. 93:28-94:2).

フラヴィアノスに続いて信仰告白を読み上げた司教のうち、セレウケイアの司教バシレイオスの文書は特別注目に値しよう。なぜなら、それはアンティオケイアとの合同を歓迎したキュリロスの書簡からフラヴィアノスがこの席で読み上げた信仰告白までの調停案を貫く表現に重大な訂正を加えたからである。

「二つの本性において認められる一人の私たちの主イエス・キリストを拝む。一つの本性を代々に先立って父の栄光の輝きである方として自分自身のうちに持っていたが、もう一つを私たちのため母から生まれた方として、その母から受け入れ、ヒュポスタシスにしたがって自分自身に合一した。完全な神であり、神の子と呼ばれ、また完全な人であり、人の子と呼ばれる。『罪を犯さなかったが、あらゆる点において私たちと同様』[ヘブ 4:15] になったことで私たちすべてを救うことを望んだ。」⁵⁸

合同歓迎書簡の中でキュリロスは二つの本性の区別を認めたとうえで、「両性から言い尽くせない合一が達成された」と宣言した⁵⁹。これにのっとってフラヴィアノスは先の信仰告白で「二つの本性からなっている一人のキリスト」を告白した。ところが、受肉によって「二つの本性」が合一された以上「単一本性」しかない、というエウテュケスの理解も可能である。キュリロスはネストリオスを論駁する際には、主体の単一性を簡潔に言い表すため「単一本性」を活用し、本性が個体となってはじめて活動を開始するといった意味において、アポリナリオスの誤りを正して、キリストが「二つの本性から成る」個体であると説いた⁶⁰。キュリロスの用語を念頭にバシレイオスは「二つの本性において」一人の主イエス・キリストが「認められる」と述べたことで、受肉の後にも両性

⁵⁸ ACO II, 1, 1, p. 117:22-28 (ACO II, 3, 1, p. 97:16-21).

⁵⁹ ACO II, 1, 1, p. 110:5-7 (ACO II, 3, 1, p. 89:13-14).

⁶⁰ A. GRILLMEIER, *Christ in Christian Tradition (I). From the Apostolic Age to Chalcedon (451)*, London-Oxford 1975, 480-483.

の区別が持続する、と力説している。この訂正はそのままカルケドン公会議が採択した教理に入っている。

エウテュケスは二度出頭を拒否したばかりか、ようやく出頭を約束した予定日には病床に臥していた。ついに 11 月 22 日、多くの修道者や警備隊に伴われて出頭した。宮廷式部官マグノスが読み上げた皇帝の書簡では広く信用されている貴族フロレンティオスに審理への参与を認めることが要請されていた⁶¹。この件の了承に続いて、これまでの会議の議事録が朗読されることになった。

まず、キュリロスの合同歓迎書簡の中で、キリストが神性にしたがえば父と、人性にしたがえば私たちと同一本質であり、二つの本性の合一が達せられたと述べる箇所が読み上げられた時、原告のエウセビオスは、声をあげて、エウテュケスを告発した。「彼はこれを告白したことはなく、一度もこれに賛同したことはありません。むしろこれとは正反対のことを考え、かつ、訪れてくるだけにでも教えてきました」⁶²。手続きについてのやり取りを経て、議長のフラヴィアノスが被告に「二つの本性からの合一を告白しますか」と尋ねると、肯定的な即答が得られた⁶³。そこでエウセビオスは問題の核心に迫る。「人となった後についても、二つの本性を告白し、肉にしたがって、キリストが私たちと同一本質であることを告白しますか、あるいは否みますか」⁶⁴。

エウテュケスは、神の本質を究明する資格が自分にはないことを理由に、しばらく回答を拒否したが、ついに、神の母が私たちと同一本質であると告げた⁶⁵。もしそうであれば母から生まれた子も私たちと同一本質であるはずだと指摘されたことを受けて、エウテュケスは、それを「今までは言いませんでしたが、...皆さんがそうおっしゃるから、今私も言います」⁶⁶と答えた。自分がそう信じるからではなく、本会議によって強制されたからそう言うのか、という質問に

⁶¹ ACO II, 1, 1, p. 137:32-138:24 (ACO II, 3, 1, p. 120:8-121:3).

⁶² ACO II, 1, 1, p. 139:26-28 (ACO II, 3, 1, p. 122:8-10).

⁶³ ACO II, 1, 1, p. 140:20-22 (ACO II, 3, 1, p. 123:11-13).

⁶⁴ ACO II, 1, 1, p. 140:17-19 (ACO II, 3, 1, p. 123:14-15).

⁶⁵ ACO II, 1, 1, p. 142:14-15.18 (ACO II, 3, 1, p. 125:12-13.17).

⁶⁶ ACO II, 1, 1, p. 142:26.33 (ACO II, 3, 1, p. 125:24.31).

は「皆様から許され、教えられたがゆえに、そう言います」⁶⁷と答えた。会議が新しい教えを導入した、という批判的懸念を退けた後、フロレンティオスは話を原告の質問に戻した。「『乙女からの受肉の後には、私たちの主が私たちと同一本質であり、二つの本性から成り立っている』と言いますか、あるいは否みますか」⁶⁸。直ちに、エウテュケスはこう告げた。「私は、人となる前には主が二つの本性から成っていたことを告白する一方、合一の後には単一本性を告白する」⁶⁹。この宣言の後、会議で読み上げられた文書に矛盾するものを排斥せよ、と要求されたエウティケスはこう答えた。

「先に申し上げたように、皆様がこれを教えるがゆえに、これまで言わなかったことを私も言います。そして、本会構成員に従います。しかし、その言い方は聖書にははっきり見つかりませんし、教父も全員がそう語ったことはありません。ところが、排斥するならば、私の父たちを排斥することになり、これは私にとって禍になります」⁷⁰。

この宣言を受けて、会議は総立ちになって、声をそろえて「彼自身こそ排斥されるべきだ」と唱えた⁷¹。そこでフロレンティオスはもう一度口をはきで、「二つの本性を告白しますか。さもなくば弾劾されますよ」⁷²とエウテュケスを戒めた。しかしながら、彼の好意の忠告は跳ね返されてしまう。すなわち、エウテュケスはフロレンティオスに向かって「アタナシオスの著作の朗読を命じてくだされば、そんなことを彼はどこにも語っていないことが分かっていただ

⁶⁷ ACO II, 1, 1, p. 143:3 (ACO II, 3, 1, p. 126:5).

⁶⁸ ACO II, 1, 1, p. 143:7-9 (ACO II, 3, 1, p. 126:9-11).

⁶⁹ ACO II, 1, 1, p. 143:10-11 (ACO II, 3, 1, p. 126:12-13).

⁷⁰ ACO II, 1, 1, p. 143:32-144:2 (ACO II, 3, 1, p. 127:3-6).

⁷¹ ACO II, 1, 1, p. 143:30-144:2 (ACO II, 3, 1, p. 127:7).

⁷² ACO II, 1, 1, p. 144:22-23 (ACO II, 3, 1, p. 127:25-26).

けるでしょう」⁷³と返したのである。こう言われたフロレンティオスもついにあきらめる。「二つの本性を告白しない者は、正しくは信じていない」⁷⁴。

結局、エウテュクスに還俗と破門の判決が言い渡された⁷⁵。正式な上訴の意図は、即座に宣言されるべきであったが、フロレンティオスに伝えられただけで、会議の相手に宣言されなかったことは、のちに開催された強盗会議においても確認された⁷⁶。また、会議の後フラヴィアノスがレオ 1 世に送った最初の書簡で案件の終了が報告されただけで、上訴についての言及はない⁷⁷。しかし、上訴の事実が判明すると、フラヴィアノスはレオ 1 世に詳しい情報を提供し、判決への賛同を要請した⁷⁸。

正式な上訴であったかどうかはともかくとして、会議の後間もなく、エウテュクスはレオ 1 世はじめ主要な教会指導者に自身が蒙った不当な扱いを訴えた⁷⁹。449 年 3 月 30 日、ディオスコロスの進言に応じて⁸⁰、皇帝は 8 月 1 日を開会予定でエフェソスに新たな帝国教会会議を召集する勅令を出し、その中でテオドレトスが参加資格者から除外されていると確認した⁸¹。

そのころ、エウテュクスは議事録を読む機会を得て、自分の記憶に合わない部分に気づき、書記による偽造を訴えた⁸²。これに答えて、4 月 9 日、コンスタンティノポリスに滞在していた 28 名の司教は、カイサレイアの司教タサリオ

⁷³ ACO II, 1, 1, p. 144:24-25 (ACO II, 3, 1, p. 127:27-28).

⁷⁴ ACO II, 1, 1, p. 145:5-6 (ACO II, 3, 1, p. 128:14-15).

⁷⁵ ACO II, 1, 1, p. 145:10-147:31 (ACO II, 3, 1, p. 128:19-131:19).

⁷⁶ ACO II, 1, 1, p. 175:30-176:10 (ACO II, 3, 1, p. 164:25-165:13).

⁷⁷ ACO II, 1, 1, p. 36:8-37:26 (ACO II, 3, 1, p. 7:22-9:2; ACO II, 2, 1, p. 21:11-22:30).

⁷⁸ ACO II, 1, 1, p. 38:11-40:13 (ACO II, 3, 1, p. 9:12-11:8; ACO II, 2, 2, p. 23:2-24:13).

⁷⁹ レオ 1 世に送った書簡の全文 (ACO II, 2, 1, p. 33:12-34:34) とラテン語訳 (ACO II, 4, p. 143:29-145:4) が残っている。さらに、ディオスコロスに送った書簡の断章 (ACO II, 5, p. 117:4-7) とラヴェンナの司教がエウテュクスに送った返書 (ACO II/3/1, 6:2-27) が残っている。

⁸⁰ ACO II, 5, p. 117:7-8.

⁸¹ ACO II, 1, 1, p. 68:2-69:8 (ACO II, 2, 1, p. 42:37-43:30; ACO II, 3, p. 42: 31-43:32). さらに、FLEMMING 3:4-5:6 も参照。

⁸² ACO II, 1, 1, p. 178:42-149:3 (ACO II, 3, 1, p. 168:22-26).

スのもとに、議事録の調査を開始し⁸³、4月13日には、首都司教フラヴィアノスのもとに集まっていた53名の司教がこれを完了した⁸⁴。偽造告発を支持するデータが見つからなかったことを受けて、エウテュケスは裁判自体の精査を要請した。4月27日に調査委員会が開かれ⁸⁵、その席で宮廷式部官マグノスは、エウテュケスに還俗と破門を宣告する文書は、448年11月22日に彼を裁いた会議の何日も前に自分に示された、と証言した⁸⁶。ところが、その時点で、エデッサを揺るがした動乱こそが、帝国政府にとって、エウテュケスよりもはるかに深刻な問題になっていた。

1. 5. エデッサの動乱

448年、復活祭の後、アンティオケイアで開かれた定例司教会議において、エデッサの聖職者四名が捕虜解放のために集められた献金の横領の廉で自分たちの司教イバスを告訴するという事態になった。議長を務めるドムノスに渡された告訴状は、イバスの甥で、ハランの司教を務めるダニエルをも、教会財産の横領に加えて、姦通で訴えている⁸⁷。ところがハランの聖職者も告訴を支持していたにもかかわらず、ドムノスはダニエルの件を取り上げようとはせず、イバスについても、献金の一部を別の目的達成に当てるのは司教の権限だと、告訴を退けた。そこで、彼らは教会法の当該規定の朗読を要請したが、二日間も返事がなかったので、訴え出たエデッサの聖職者のうち二人はアンティオケイアを去り、帝国首都駐在司教会議に告訴の審理を申し込んだ⁸⁸。アンティオケイアに残っていた二人は、破門の憂き目に遭ってしまい、これを受けて、彼らもコンスタンティノポリスに赴いた⁸⁹。

⁸³ ACO II, 1, 1, p. 150:1-151:28 (ACO II, 3, 1, p. 131:25-166:7).

⁸⁴ ACO II, 1, 1, p. 148:1-149:20 (ACO II, 3, 1, p. 131:25-133:13). 両会議の議事録は二回目の名簿の後に始まり、ワンセットとなっている。

⁸⁵ ACO II, 1, 1, p. 177:1-179:13 (ACO II, 3, 1, p. 166:8-169:4).

⁸⁶ ACO II, 1, 1, p. 178:18-20 (ACO II, 3, 1, p. 168:1-3).

⁸⁷ FLEMMING 59:10-20; 69:6-9.

⁸⁸ FLEMMING 59:21-25.40-43.

⁸⁹ FLEMMING 59:43-45.48-49.

結局、審理の管轄はアンティオケイアの司教からティルス、ヒメリア、ペイルートの各司教によって構成されるべき委員会に移管された⁹⁰。ペイルートで行われた審理の結果、イバスを告発した聖職者の破門は解かれたが⁹¹、イバス自身については合意が成立しなかった⁹²。449年2月25日には、ティルスで開かれた会議で無罪判決が降りた⁹³。エデッサの聖職者六十六名が署名した覚書が、判決にどのような影響を与えたかは分からない。その覚書は、宣誓によって、異端と取沙汰されている一連の発言⁹⁴をイバスから一度も聞いたことがない、と証言するものであった⁹⁵。

無罪判決を契機に、エデッサでは復活祭（439年3月27日）の後に動乱が起こった⁹⁶。4月12日には新総督カイレアスが、入城の際に、イバスの解任と正統司教の選任を叫ぶシュプレヒコールで迎えられた⁹⁷。二日後、総督の官邸に押し寄せた市民と聖職者の代表は、まとも叫びながら、その要請を繰り返した⁹⁸。今回はネストリオスの異端に加えて、本人と親戚による教会財産の横領が特に強調された⁹⁹。

その後も動乱は散発し、動乱を伝える総督の報告書は新たな勅令公布のきっかけとなった。5月15日付でアレクサンドリアの司教ディオスコロスとエルサレムの司教ユウェナリスに宛てた勅令では、東方において、多くの修道者が群を抜いてネストリオス派と戦っていることにかんがみて、皇帝がその代表者と

⁹⁰ ACO II, 1, 3, p. 19:7-24 (ACO II, 3, 3, p. 23:6-22).

⁹¹ FLEMMING 59:45-48.

⁹² ACO II, 1, 3, p. 24:13-26:18 (ACO II, 3, 3, p. 29:19-32:11).

⁹³ ACO II, 1, 3, p. 14:7-16:15 (ACO II, 3, 3, p. 17:1-19:25).

⁹⁴ 一番取沙汰されていた発言は、次のとおりである。「キリストが神となったことを妬むことはない。実際に、神となったなら、私も神となった。なぜなら、キリストは私の本性から成り立っているからだ」（FLEMMING 41:27-29; 45:7-10）。

⁹⁵ ACO II, 1, 3, p. 35:1-37:37 (ACO II, 3, 3, p. 43:9-46:16).

⁹⁶ FLEMMING p. 35:29-36.49-50.

⁹⁷ FLEMMING 17:17-29.

⁹⁸ FLEMMING 17:31-21:11.

⁹⁹ FLEMMING 19:8-11.31-32.

して、修業の面においても優れているバルサウマを今回の帝国教会会議に派遣することを決意したことが記され、帝はこの決意への了承を要請している¹⁰⁰。

6月27日付で来るべき会議の参加者に宛てられた勅令はイバスの問題に集中している¹⁰¹。聖職者、修道者、役員のみならず、「一般市民」もイバスの冒涇を証言しているので、これを無視してはならず、エデッサをイバスから解放し、「立派な生活と優れた正統信仰のある人にとって替えられるべきだ」¹⁰²と力説したうえで、依然として問題の処理を委任されているティルス、バイルート、ヒメリアの司教の報告を参考に会議がしかるべき措置を決議しなければならない、と命じている¹⁰³。

会議の開催中に皇帝の代表を務めるべきエルピディオスとエウロギオスに宛てられた勅令は彼らにすべての総会への出席および、エウテケスの裁判に関わっていた司教たちが沈黙を守りながら出席するよう、監督を命じている¹⁰⁴。これと関連する勅令は、アジアの総督プロクロスに皇帝代表への全面的な支援を命じてもいる¹⁰⁵。会議自体に宛てられた勅令では、帝は目下の危機の責任を首都司教に負わせるとともに、なおもネストリオスの諸見解を支持する者の追放を命じた¹⁰⁶。

1. 6. レオ1世の取り組み

エウテケスの還俗と破門を決めた会議の資料が届いたとき、レオ1世は5月21日付の感謝状で帝国首都司教に支持を約束し¹⁰⁷、6月中、西方教会のキリ

¹⁰⁰ ACO II, 1, 1, p. 71:1-17 (ACO II, 3, 1, p. 46:3-16). 本人に宛てられた勅令の日付は5月14日である (ACO II, 1, 1, p. 71:19-31 (ACO II, 3, 1, p. 46:18-29)).

¹⁰¹ FLEMMING 5:38-7:18.

¹⁰² FLEMMING 7:1.6-8.

¹⁰³ FLEMMING 7:11-15.

¹⁰⁴ ACO II, 1, 1, p. 72:5-31 (ACO II, 3, 2, p. 47:4-29; ACO II, 2, 1, p. 45:36-46:23).

¹⁰⁵ ACO II, 1, 1, p. 73:4-18 (ACO II, 3, 1, p. 48:1-14; ACO II, 2, 1, p. 46:25-32).

¹⁰⁶ ACO II, 1, 1, p. 73:21-74:6 (ACO II, 3, 1, p. 48:17-49:5; ACO II, 2, 1, p. 47:1-19). 日付はないが、以前に比べて一層固くなっている調子が示唆するように、開会の直前に出たのだろう。

¹⁰⁷ ACO II, 4, p.9:2-14.

スト論を公式に解き明かすべき書簡を口授した¹⁰⁸。これは『フラヴィアノスへの書簡』または『レオの教書』として歴史に名を残している¹⁰⁹。

この中でキリストの主体の単一性以上に本性の区別が力説されている、というのが古今変わらぬ定評である。実際に西方では二つの実体ないしは本性を区別することが常に伝承の要であった。主体の単一性を表現するため、初めてテルトゥリアヌスは「一つのペルソナ」について語ったが¹¹⁰、アウグスティヌスはこれを「二つの本性」と共にキリスト論の中心に据えた¹¹¹。この伝承を継承して、レオはこう力説する。

「両本性の固有性は保たれたまま、一つのペルソナへと合一している。こうして、卑しさが威厳から、弱さが力から、死すべきものが永遠 [のもの] から受け取られた。私たちの身についている負債を弁済するために、苦しみ得ない本性が苦しみ得る本性と一つに結ばれ、こうして私たちの癒しにふさわしい仕方で、一つにして同じ方、神と人との間の仲介者、人であるキリスト・イエス [一テ 2:5 参照] は、一方において死ぬことができ、他方において死ぬことはできなかった。」¹¹²

この箇所の冒頭はそのままカルケドン公会議が採択した教理に入っているが、アンティオケイア伝承に劣らず、両性の区別を力説する次の有名な個所は、特に古代キリスト単性論派にとって耐えがたい躓きであった。

¹⁰⁸ ACO II, 2, 1, p. 24:17-33:10=COD 77-82. 日本語訳は、上智大学中世思想研究所編訳『中世思想原典集集成 4 初期ラテン教父』（平凡社・1999年）1188-1198頁にある。

¹⁰⁹ 以下についてより詳しく、拙論「『一つにして同じ方』—古代キリスト論に対するラテン教父の貢献—」『南山神学』（第32号・2009年）60-68頁参照。

¹¹⁰ 上掲拙論「一つにして同じ方」35-36頁参照。

¹¹¹ 同書 53-55頁参照。

¹¹² COD 78:7-18. 上掲『中世思想原典集集成』1191頁参照。

「憐れみを示すことによって神が変化をこうむることがないように、尊厳を受けることによって人間が神へのみ込まれることはない。どちらの身分 [7 月 2 : 6,7 参照] も他方と共にありながら、それぞれに固有の働きをなす。言が言に固有のこゝろを行い、肉は肉に固有のこゝろを成し遂げる。一方は奇跡できらめき、他方は暴行を受ける。言が父と等しい栄光が離れることがないように、肉は私たち人類の本性を去ることはない。」¹¹³

三名の教皇使節は『フラヴィアノスへの書簡』に加えて複数の書簡を携えて出港したが、途中一名が死亡したため二名が開会に間に合って到着した。皇帝宛ての書簡でレオはエウテュケスを弾劾したうえで、会議が彼を正統信仰に戻すべき希望を表明している¹¹⁴。会議の参加者を相手に、自分とフラヴィアノスとの協調を力説するとともに、エウテュケスに対しては文面での正統な信仰告白と自説の排斥が課されるべきだ、と力説している¹¹⁵。特にこの書簡が会議の席で読み上げられなかったことは、別段驚くには値しないだろう。

2. 第一回総会

8月6日の勅令でテオドレトスの参加禁止が再確認されたうえで、ディオスコロスが議長に、エルサレムの司教ユヴェナリスとカイサレイアの司教タラシオスは議長補佐に任命された¹¹⁶。

2. 1. 開始

8月8日、教皇使節と共に130名の司教、4名の司祭、および修道者バルサウマは、431年にも会場であったエフェソス司教座聖堂に集まった¹¹⁷。その時と

¹¹³ COD 79:1-12. 上掲『中世思想原典集成』1192-93頁参照。

¹¹⁴ ACO II, 4, p. 9:17-10:3.

¹¹⁵ ACO II, 4, p. 15:13-16:15.

¹¹⁶ ACO II, 1, 1, p. 74:5-28 (ACO II, 3, 1, p. 49:7-25).

¹¹⁷ 第一回総会の議事録はカルケドン公会議第一回総会の議事録の中に含まれている (ACO II, 1, 1, p. 77:12-195:9 [ACO II, 3, 1, p. 42:30-258:12]) 。

同様に、首席書記官を務めるヨハネスも、おそらく、アレクサンドリアの聖職者であった。教皇使節が持参してきた書簡の一つはキオスの司教ユリアヌスに宛てられていた¹¹⁸。イタリアの生まれ育ちであったうえ、エウテュケスの還俗と破門を定めた会議とその議事録検査にも携わっていたので、レオは彼にギリシャ語が分からない使節への情報と言語の両面での援助を期待していたのだろう。しかし、ユリアヌスは開会から欠席していた。

招集勅令が読み上げられた直後、教皇使節ヒラリウスは会議に宛てられているレオの書簡も読み上げられるよう要請した¹¹⁹。議長ディオスコロスの指示で首席書記官は書簡を受け取ったものの、読み上げず、まず、修道者バルサウマの出席根拠であるディオスコロスとユヴェナリス宛ての5月15日の勅令を読み上げた。引き続いて、二人の皇帝代表エルピディオスとエウロギオスに宛てられた勅令が読み上げられることになった。朗読に先立って、後者は自分の言葉で皇帝の固い決心を参加者に伝えた¹²⁰。開会最後の手続きとして会議に宛てられた勅令が読み上げられた¹²¹。

信仰の問題にかかわる審議の大前提は、エフェソス公会議で採択されたニカイア信条とは「異なる信仰」の禁令であった¹²²。ディオスコロスが先導していた質疑では、ニカイア信条について、いかなる追加も削除も、また、それに変わる信条の作成も禁じられていることは、かなりの騒ぎを伴って、確認され、教皇使節もこれに賛成した¹²³。

このように合意の確認ができた、と判断した皇帝代表エルピディオスの指示で、エウテュケスが会場に案内され、巧みに開催中の会議に宛てる形で構想された上诉状が読み上げられた¹²⁴。上诉状の序文は、青年からの念願に反して、

¹¹⁸ ACO II, 4, p. 16:17-17:7.

¹¹⁹ ACO II, 1, 1, p. 83:1-14 (ACO II,, 3, 1, p. 58:13-24).

¹²⁰ ACO II, 1, 1, p. 85:8-86:10 (ACO II,, 3, 1, p. 60:22-61:30).

¹²¹ ACO II, 1, 1, p. 86:11-18 (ACO II, 3, 1, p. 60:1-8).

¹²² 上掲拙論「エフェソス公会議」266頁参照。

¹²³ ACO II, 1, 1, p. 86:31-87:7 (ACO II,, 3, 1, p. 62:19-31).

¹²⁴ ACO II, 1, 1, p. 90:17-91:14; 92:5-8; 94:24-96:20 (ACO II, 3, 1, p. 66:18-67:21; 68:15-18; 71:19-73:23).

静かな修道生活に代わって、いま危険や迫害にさらされているのは、エフェソスで以前に開かれた公会議の諸規定にしたがって信仰の刷新を認めないからだ、と断言する。引き続いて本文は、まずニカイア信条を引用し、いかなる追加も削除も許されていない意味において、ニカイア信条とは「異なる信仰」の禁令が理解されるべきであることは、エフェソス公会議の議長キュリロス自身から自分に送られてきた議事録で判明できる、と力説してから、こう続く。この信仰に生きる自分をエウセビオスがフラヴィアノスと他の司教たちに告訴してしまった。フラヴィアノスは、答弁のため自分に出頭を命じたものの、自分が応じないことを前提に、不従順の廉で有罪判決を準備した。ついに出頭した時にはエウティケスが自ら用意していた信仰告白文が受け付けられず、代わりに口頭で自分の信仰を宣言するように求められたことに応えて、エウティケスはニカイア・エフェソス両公会議の決定に従う旨を宣言した。再びより詳しい宣言を求められたとき、エウティケスは今回のような会義の開催を要請し、その決定に従うことを約束した。ところがいきなり有罪判決が言い渡されたうえ、街中いたるところに公表されてしまった、と訴えたうえで、エウティケスは自らの復権と論敵の処罰を求めて、会議への上訴が終わっている。

フラヴィアノスは原告へのヒアリングを申請したが、勅令によってエウテュケスの裁判に関わった司教には発言が禁じられていたため、申請は却下された。引き続いて還俗と破門を可決した会議の議事録の朗読が要請され、教皇使節も、議事録の朗読の前にレオの書簡が読み上げられることを条件に、この案に賛成した。ところがエウテュケスは口をはさみ、八百長の攻撃でまたも『フラヴィアノスへの書簡』の朗読は見送られてしまった。

2. 2. エウテュケスと仲間の復権

エウテュケスを裁いた会議の議事録はエウセビオスの告訴状を受理した 448 年 11 月 12 日の首都駐在司教会議にまでさかのぼる¹²⁵。その際にフラヴィアノ

¹²⁵ ACO II, 1, 1, p. 100:3-186:12 (ACO II, 3, 1, p.77:18-192:13).

スを読み上げた信仰告白の朗読は激しい弥次を引き起こしたため、当時この信仰告白に同意を表明していたスミュルナの司教アエテリコス、フラヴィアノスからの強制を理由に同意表明を撤回してしまった¹²⁶。

11月22日の議事録が読み上げられた際、被告エウテュケスに受肉の後にも二つの本性を認め、かつ、肉にしたがえばキリストが私たちと同一本質であると認めるかどうかという問いへの回答に対し原告エウセビオスが被告エウテュケスを責める箇所が読み上げられたとき、激しいシュプレヒコールが起こった。「エウセビオスを捕まえよ。火に投げ込め。火炙りにせよ。キリストを二つの本性に分割するように、その体を切断せよ」¹²⁷。

セレウケイアの司教バシレイオスによれば、いつもそのようなシュプレヒコールの先導者は、ディオスコロスとともにエジプトから来ていた修道者とバルサウマの仲間であった¹²⁸。だから「強盗会議」よりは「修道者たちの会議」こそ適切な名称ではないか、という考えもある¹²⁹。原告エウセビオスの火炙りや体の切断を求めたシュプレヒコールに続いたディオスコロスと修道者たちとのやり取りは両者のチームワークを物語る。「人となった後にも二つの本性について語ってよいか」とディオスコロスが尋ねた時「そのように語る者は排斥されるべきだ」という回答が戻った¹³⁰。さらに、ディオスコロスは「声を上げることができない方が手を挙げなさい」と誘った時の反応としては、またも「二つについて語る者は排斥されるべきだ」との反応が記録されている¹³¹。こうしたやり取りに加えて、自らの信仰告白も「体の切断」を叫ぶシュプレヒコールで

¹²⁶ ACO II, 1, 1, p. 118:23-119:12 (ACO II, 3, 1, p. 98:21-99:13).

¹²⁷ ACO II, 1, 1, p. 140:25-26 (ACO II, 3, 1, p. 123:16-17).

¹²⁸ ACO II, 1, 1, p. 93:21-26 (ACO II, 3, 1, p. 70:5-10).

¹²⁹ W.H.C. FREND, *The Rise of the Monophysite Movement. Chapters in the History of the Church in the Fifth and Sixth Century*, Cambridge 1972, 136.

¹³⁰ ACO II, 1, 1, p. 140:27-29 (ACO II, 3, 1, p. 123:18-20).

¹³¹ ACO II, 1, 1, p. 140:30-32 (ACO II, 3, 1, p. 123:21-23).

迎えられたことを受けて、バシレイオスもついにそれを「人となり、肉となった独り子の単一本性を拝む」との宣言によって替えた¹³²。

エウテュケスがなおも自分を裁いた会議の議事録の偽造を訴え続けたので、439年4月その検証を行った会議の議事録もこの席で読み上げられた。その際に、フラヴィアノスは議事録に一切の変更が加えられたことはない、と改めて否定した一方で、自己弁明の機会が与えられていないことに抗議した¹³³。発言は妨げられていない、という反論も記録されているものの、自己弁明の機会を与えられた痕跡は議事録にはない。

議事録では、フラヴィアノスの発言権をめぐるやり取りには、エウテュケスの復権への賛否宣言が直結している¹³⁴。すでに18年前のエフェソス公会議でアレクサンドリア主導の議事進行に協力したエルサレムの司教ユウェナリス¹³⁵が最初に立ち、賛成を宣言した。協調することに心を入れ替えたアンティオケイアの司教ドムノスが二番目に立って賛成を宣言した後、同様の宣言が繰り返された。教皇使節も反対を表明しなかった¹³⁶。

こうしてエウテュケスの復権が認められた後、首席書記官がフラヴィアノスを相手取る告訴状を読み上げた。修道司祭ナルセスを筆頭に、エウテュケスの修道院に所属していた三十五名の署名が付いた訴状だった。それによれば、エウテュケスの還俗と破門を議決し、かつ、彼との交際を禁じた会議に逆らって¹³⁷自分たちはエウテュケスとの縁を切らなかつたので、排斥され、その状態

¹³² ACO II, 1, 1, p.179:14-21 (ACO II, 3, 1, p.169:5-11)。カルケドン公会議の第一回総会においてバシレイオスは438年11月12日の会議で読み上げた自分の信仰告白の訂正に導いた話や思いをこう振り返った。キリストについて「単一本性」を絶対的に主張するならば、神性と人性との混合を主張することになる。「肉となった神の言の」を加え、かつ、その表現をキュリオスのように理解するならば、自分の信仰告白と同じ意味になる、と述べた後、以前に叫んでいた者が静かになった (ACO II, 1, 1, p.93:34-39 [ACO II, 3, 1, p. 70:19-23])。

¹³³ ACO II, 1, 1, p.181:17-182:7 (ACO II, 3, 1, p.171:24-172:17)。

¹³⁴ ACO II, 1, 1, p.182:11-186:12 (ACO II, 3, 1, p.172:21-192:13)。

¹³⁵ 拙論「エフェソス公会議」262-263頁参照。

¹³⁶ ACO II, 1, 1, p.182:11-186:12 (ACO II, 3, 1, p. 172:21-192:13)。

¹³⁷ ACO II, 1, 1, p.176:18-19 (ACO II, 3, 1, p. 165:22-24)。

がもう9ヶ月続いている、と。ニカイア信条とエフェソス公会議に加えて、エウテュケスが開催中の会議に提出した文書の承認を表明したうえで、彼ら三十五名の復権も認められた¹³⁸。

2. 3. フラヴィアノスとエウセビオスの罷免

続いて、ディオスコロスの動議とドムノスの支持でエフェソス公会議第六総会の議事録が読み上げられた¹³⁹。そこでは「二つの本性」をキーワードに掲げる長文の信条が拒否されたうえで、ニカイア信条とは「異なる信仰」が禁じられ、禁令を犯した司教の罷免、司祭の還俗、信徒の破門が定められている¹⁴⁰。この箇所を朗読を受けて、ディオスコロスは審議事項をこうまとめた。

「皆さんがお聞きになったとおり、エフェソスの第一回の教会会議はニカイア信条とは違って教えたり、また、れに変化を加えたり、さらにはこれを超えて新しい問題を提起する者を戒めます。今各自文面により、神学研究においてニカイア信条を超える者が罰せられるべきか否かを知らせていただきたい。」¹⁴¹

二人の教皇使節は最初に立ったカイサレイアの司教タラシオスとほぼ同じ表現でニカイア信条の不可触性を力説したが、ヒラリウスは、『フラヴィアノスへの書簡』ではまさにこの信条の枠内で受肉の秘義が解き明かされていると訴え、再度朗読を求めた。しかしこれを聞かなかったかのように、ディオスコロスは採決に移った。

¹³⁸ ACO II, 1, 1, p.186:13-189:19 (ACO II, 3, 1, p. 192:14-196:14).

¹³⁹ 拙論「エフェソス公会議」266頁参照。

¹⁴⁰ COD 65:16-66:7.

¹⁴¹ ACO II, 1, 1, p. 190:1-4 (ACO II, 3, 1, p. 235:18-20).

「エフェソスの第一回の教会会議はニカイア信条に変化を加える者を誰でも戒めるのだから、コンスタンティノポリスの〔司教〕フラヴィアノスとドリュラインの〔司教〕エウセビオスは罷免されるべきである。私は彼らの降格を申し入れる。これについてご出席の一人ひとりに意見を聞かせていただきたい。」¹⁴²

直ちにフラヴィアノスは上訴の意図を知らせ、教皇使節のヒラリウスもラテン語で議長の評決案への反対を宣言した¹⁴³。またも、ユヴェナリオスに次いでドムノスが立ち、議長案に賛成した。二人を含めて決議に署名した者の数は114名にのぼっているので、参加者名簿を十数名しか下回っていない計算である¹⁴⁴。この事実に対して、フラヴィアノスはレオ1世に送った上訴状において、少数の司教だけが罷免に賛成したと伝えている¹⁴⁵。

3. 総決算

フラヴィアノスとエウセビオスの罷免をもってギリシャ語の議事録とラテン語訳は終わっている。なぜなら、カルケドン公開義において、448年8月8日の第一回総会の後にイバスを裁いた会議の議事録の朗読が要請されたとき、教皇使節は、教皇により不法と退けられた会議の議事録が他の教会会議と同等に読み上げられることに反対していたからである¹⁴⁶。

3. 1. 出直し

¹⁴² ACO II, 1, 1, p. 191:18-26 (ACO II, 3, 1, p. 238:18-26).

¹⁴³ ACO II, 1, 1, p. 191:29-31 (ACO II, 3, 1, p. 238:28-29).

¹⁴⁴ ACO II, 1, 1, p. 192:3-195:9 (ACO II, 3, 1, p. 239:6-252:19)。ラテン語訳はギリシャ語の校訂版より詳しい。

¹⁴⁵ ACO II, 1, 2, p. 78:39-79:11。顕著な教皇庁慣用語法のため、教皇使節ヒラリウス自身がフラヴィアノスの上訴状を執筆した、という見解もある (E. CASPAR, *Geschichte des Papsttums von den Anfängen bis zur Höhe der Weltherrschaft I*, Tübingen 1930, 488, n. 3)。

¹⁴⁶ ACO II, 1, 3, p. 38:6-11 (ACO II, 1, 3, p. 46:26-27; p. 47:3).

シリア語の議事録によれば¹⁴⁷、土曜日であった 8 月 20 日に開かれた会議には二人の教皇使節とアンティオケイアの司教ドムノスが欠席していたので、それぞれに使節が遣わされ、22 日に開催予定の会議への出席が要請された¹⁴⁸。前者に遣わされた使節には、彼らの書記を通じてこう答えた。会議への参加のための教皇による委任はエウテケスの件に限られているのだから、たとえ十回使節が遣わされたとしても会議に集まることはできない¹⁴⁹。病床に付していたドムノスは、少しでも体調が良くなれば出席すると約束したが、開催日の朝、使節を病床に呼び付け、ネストリオスの同調者や彼らの作に対するどんな措置にも賛成するとの意志を伝えた¹⁵⁰。

会議の席で使節の報告を受けて、カイサレイアの司教タラシオスは、会場の外に集まっている修道者たちへのは配慮からも、教皇使節の出席を断念するとともに、再び審議に臨むことを提案した¹⁵¹。その間には、8 月 6 日にコンスタンティノポリスから送達された勅令もエフェソスに届いていたので、首席書記官がそれを読み上げた¹⁵²。これで教皇使節不在の会議にもしかるべき恰好が与えられた、と皇帝側の関係者も安心したのだろう。

勅令朗読の後、首席書記官はバルサウマ宛ての勅令を携えて、エデッサからやってきた修道者たちを入城させ、すでに第一回総会の初めに読み上げた勅令をもう一度読み上げたうえで、そのコピーを渡された 11 名の修道院長の名前を挙げた¹⁵³。これを受けてディオスコロスに彼らに審議への参加を命じた¹⁵⁴。

以降、七名の司教が裁判の対象となった。五名は罷免と破門、一人は罷免だけの判決を言い渡され、残る一人に対する起訴は当該地方教会会議に回された。439 年 6 月 27 日の勅令に従って、イバスの問題が最初に取り上げられたが、す

¹⁴⁷ 上記注 20 参照。

¹⁴⁸ FLEMMING 9:30-39; 163:11-13.

¹⁴⁹ FLEMMING 11:13-17.

¹⁵⁰ FLEMMING 11:29-37.

¹⁵¹ FLEMMING 11:38-13:5.

¹⁵² FLEMMING 5:11-37;13:6-11.

¹⁵³ FLEMMING 13:17-15:2.

¹⁵⁴ FLEMMING 15:3-6.

でに春以来拘留されていたこともあって、欠席裁判となった。これが先例となつて、他の六名も欠席のまま裁かれた。第一回総会の後に行われた審議に限つて言えば、欠席裁判であったこと以外に「強盗会議」という評価に値するものはなかった¹⁵⁵。

3. 2. イバスと親戚

イバスの裁判は、エデッサの動乱について総督カイレアスがコンスタンティノポリスに送った三つの報告書の朗読で始まった。三番目の終わりにイバスがかつてペルシア人マリに送った手紙¹⁵⁶が引用されているが、ベイルートで行われた審理の際にイバスが自らこの手紙を書いたことを認めた報告に答えて、「イバスの言葉は我々の耳を汚す」¹⁵⁷と騒動が起こり、見せしめのため、アンティオケイアのまっただ中でイバスをネストリオスと一緒に焼き殺すべきだ、と叫ぶシュプレヒコールまで起こった¹⁵⁸。これを受けて議長のディオスコロスはこう締めくくった。「皆さんは、自分たちからこう叫んだのではなく、聖霊が皆さんの中から声を上げたのです」¹⁵⁹。

エデッサの動乱に先立って、地元の聖職者がアンティオケイアとコンスタンティノポリスで進めた交渉についての報告を受けてから、ディオスコロスを筆頭に 21 名の司教が個別にイバスの罷免と破門を宣告すると、他の司教たちも判決を承認した¹⁶⁰。

イバスに次いで、姦通の告訴のみに絞られて、母方の甥ダニエルの件が取り上げられた。既婚婦人と同棲していたので、ダニエルは自分の司るハラン教区

¹⁵⁵ カルタゴの司教レバトウスと一緒に第 2 コンスタンティノポリス公会議に参加した助祭リベラトウスだけが伝える情報によれば、慣例ののっとり、イバスは欠席のため三回も出頭を命じられた (ACOII, 5, p.117:31-118:6)。史実ならば、当局は獄中からであっても、出頭を可能にしたのだろう。

¹⁵⁶ 上掲拙論「三章論争」20-22 頁参照。

¹⁵⁷ FLEMMING 55:22.

¹⁵⁸ FLEMMING 55:41-49.

¹⁵⁹ FLEMMING 57:10-11.

¹⁶⁰ FLEMMING 61:15-69:3.

の聖職者から姦通の罪で告訴されていたのである。イバスに加えてダニエルの審理を委任されていた司教委員会を前に、ダニエルはその罪を率直に認めた。しかし、四旬節のため判決の言い渡しが遅れたことを受け、彼は辞表を提出したので手続きの終結は本会議の議題となった¹⁶¹。三人の委員に続いて十三名の司教が還俗を宣告し、これを受けて、他の司教たちも一致して判決を承認した¹⁶²。

イバスの父方の甥ソフロニオスを相手取る告訴状は、自ら司るテラ教区の三名の聖職者から提出されていた。その中でソフロニオス自身はネストリオスの異端に加えて、異教の魔術と占星術のかどでも訴えられた。さらに、ソフロニオスの息子については、ユダヤ教徒の友人と食事をするまでの交際に至ったため信徒らが彼を祭儀の集会から追い立てた際に、彼が異教徒の司令官のもとに逃れ、そのために流血の惨事が起り、これがために2か月後の今でも教会が閉鎖されていることも告発されていた¹⁶³。告訴状の朗読を受けて、議長タラシオスは、本事件はイバスの後任が選ばれた後に開かれる地方教会会議に審理が任されるべきである、と提案し、満場一致で承認された¹⁶⁴。

3. 3. エイレナイオスの罷免追認と側近の追放

以上の審理に続いて、448年2月以来、問題発生の直接原因であったエイレナイオスの処遇が議題となった。首席書記官が行った問題提起によれば、エイレナイオスは皇帝の勅令で罷免されたので、合法的にティルス（テイルス）の司教職はその後任に選ばれたフォティオスに移ったが、再審の目的は皇帝の決定を教会会議の決議によって追認することだけである¹⁶⁵。そのため一切の議論なしに判決の言い渡しが始まった。

¹⁶¹ FLEMMING 69:26-40.

¹⁶² FLEMMING 71:473:28.

¹⁶³ FLEMMING 81:11-85:8.

¹⁶⁴ FLEMMING 85:9-15.

¹⁶⁵ FLEMMING 75:1-5.

ディオスコロスとユヴェナリオスをはじめ、九名は個別に宣告に立ち、こぞって罷免を宣告したが、そのうち四名は破門、一人は還俗をこれに加えた¹⁶⁶。満場一致の意思表示としては、判決への賛意に加えて、エイレナイオスによるすべての司教職行使の取り消しが記録されている¹⁶⁷。

すぐにも問題となったのは、エイレナイオスによってビュブロスの司教に叙階されたアキュリノスであった。直接の上司に当たるティルスの司教フォティオスに加えて、その上司であるアンティオケイアの司教ドムノスからも数回出頭を命じられたが、相変わらず身を隠していた。そのため、後者は前者にビュブロスのため新しい司教の叙階を許可した。これが延期されたのは、現に開催中の帝国教会会議の判断を仰ぐためであった¹⁶⁸。

ディオスコロスは問題の司教について罷免を宣告したうえで、地域教会の最高責任者としてフォティオスに注意を勧告した¹⁶⁹。これに答えてフォティオスは、「ネストリオスの誤りになおも病んでいる司教もしくは聖職者が、フェニキア地方に一人も見つからないように全力を尽くす」¹⁷⁰と約束した。その後七名が罷免を宣告したことを受けて、残りの司教らも満場一致で賛成した¹⁷¹。

3. 4. テオドレトスとドムノスの「一組」

最後にテオドレトスとドムノスを相手取る審議では、会議が進めていた総決算は頂点に達した。前者は、ネストリオスをめぐる論争が始まる前から山脈地帯にあるキュロスの司教を務めていた。アンティオケイアに近いうえ、当時は、アンティオケイア伝承の一番有能な代弁者であったので、常にオリエンズ州教

¹⁶⁶ FLEMMING 75:7-77:11.

¹⁶⁷ FLEMMING 77:12-19.

¹⁶⁸ FLEMMING 77:27-32.

¹⁶⁹ FLEMMING 77:33-48.

¹⁷⁰ FLEMMING 77:49-79:2.

¹⁷¹ FLEMMING 79:545.

会の最高責任者でもあるアンティオケイアの司教にとっては右腕であった。テオドレトスとドムノスが「一組」¹⁷²と称せられていた所以である。

審議は、アンティオケイアの聖職者ペラギオスから会議に提出された嘆願書の朗読で始まった¹⁷³。嘆願の要は、人々に聖書を教える権利を返してほしい、ということであった。その権利を取り上げた側こそ正当性を欠いていることを示すためペラギオスは、テオドレトスの二作を持参していた。一つは、431/32年の冬、修道者のために書かれたキュリロスとエフェソス公会議の駁論である。朗読に対する反応は記録されていない¹⁷⁴。二作目は439年に書かれた『ディオドロスとテオドロスのための弁明』だが、題が読み上げられただけで「これが罷免に足りる」¹⁷⁵と叫ぶ声が上がった。抜粋された十五個所の朗読に続いて、ディオスコロスは罷免と還俗に加え、破門の判決をも提案し、会場は満場一致で賛成した¹⁷⁶。

そこでドムノスの病床に使節が使わされ、イバスからテオドレトスまでの各判決へのドムノスの賛意を得て使節が会場に戻ってきたとき¹⁷⁷、すぐにも今度はドムノス自身を狙う三弾の攻撃が始まった。

第一弾を発したのは、アンティオケイアの聖職者キュリアコスであった。会議に提出した嘆願書では、主にテオドレトスとの久しい交友に加えて、勅令による罷免の後にも続いたエイレナイオスの保護とフラヴィアノスとの連携が非難された¹⁷⁸。その後、キュリアコスから提出された二つの資料が読み上げられた。一つはドムノスの説教から抜粋された一連の発言である¹⁷⁹。朗読が終わった時、次のシュプレヒコールが上がった。「イバスさえもそんなことを言っ

¹⁷² FLEMMING 89:25.

¹⁷³ FLEMMING 85:29-91:16.

¹⁷⁴ FLEMMING 91:27-105:12.

¹⁷⁵ FLEMMING 105:17.

¹⁷⁶ FLEMMING 109:40-113:22.

¹⁷⁷ FLEMMING 113:25-40.

¹⁷⁸ FLEMMING 115:24-117:45.

¹⁷⁹ FLEMMING 117:50-119:39.

いない。ドムノスこそ彼の教師だ。冒涇者は排斥されるべきだ」¹⁸⁰。引き続いて読み上げられたもう一つの資料は、ディオスコロスの圧力に対して、フラヴィアノスの支援を願うドムノスの書簡である¹⁸¹。その朗読に答えたシュプレヒコールの一句は「ドムノスよ、あなたは正統信仰の持ち主ディオスコロスを嫉妬していた」¹⁸²というものであった。

攻撃の第二弾を發したのは、ドムノスの人事政策を告發するためエフェソスに出かけてきた二つのグループであった。その一つから提出された資料によれば¹⁸³、エメサの司教座が空席になった時、地域の司教たちが選んだ司祭に代わって大衆の支持を得ていたウラニオスが候補者となり、テオドレトスに説得されて、ドムノスは彼を司教に任命し、前任地からそのためにアルカイの司教座に移籍されたティモテオスに、按手によるウラニオスの叙階を命じた。

もう一つのグループが提出した資料によれば¹⁸⁴、アンティオケイアの司教になってから間もなく、ドムノスはアンタラドスの司教アレクサンドロスを解任し、その教区の管理をアラドスの司教パウロスに兼務させた。七年間も続いた拘留の末、テオドレトスが起草した宣誓への署名を条件に、アレクサンドロスは自由を回復した。司教職を行使しないことに加えて、皇帝や教会会議に上訴しないことが宣誓の要であったため、アレクサンドロスに代わって、彼の司教職の回復及び宣誓の無効宣言を要請するため、一人の助祭と三人の修道者が本会議に臨んだのであった。実際、強盜会議の後、パウロスはアラドスの司教座を保った一方、アレクサンドロスにはアンタラドスの司教座が返された¹⁸⁵。

攻撃の第三弾は、448年、アンティオケイアの修道者がアレクサンドリアへ持参していった資料および彼らのためにディオスコロスとドムノスとの間で始

¹⁸⁰ FLEMMING 119:40-42.

¹⁸¹ FLEMMING 119:47-123:18.

¹⁸² FLEMMING 123:25-26.

¹⁸³ FLEMMING 123:39-127:10.

¹⁸⁴ FLEMMING 127:11-129:27.

¹⁸⁵ FLEMMING 178:48-51.

まった文通の朗読であった¹⁸⁶。ディオスコロスに送った最後の書簡において、430年11月、キュリロスからネストリオスに送られた十二破門条項の受理を要求されたドムノスは、アレクサンドリアとアンティオケイアとの間に433年以来続いた平和を保つため、十二破門条項については言及を控えよう、という懇願で文通を結んでいた。朗読が終わると、の懇願を念頭に、ディオスコロスは尋ねた。「神を恐れる皆さん、どう思いますか。われらの至聖なる父キュリオスの十二条項を捨てるべきでしょうか」¹⁸⁷。直ちに声が上がった。「それらを捨てる者は排斥されるべきだ」¹⁸⁸。これに続いて記録されている十二名の個別宣告はすべて罷免を言い渡すものであったものの、排斥の宣告は半分の六名に留まっている¹⁸⁹。

以上はシリア語の議事録のすべてである。主要な内容である人事について割合に詳しく述べたことには二つの理由がある。一つは、第一回総会の後に行われた審議では正当な手続きが守られたということを示すためであり、いま一つは、教会内の管轄区域を整理するためにカルケドン会議が採択した第二十八条の背景の一部を浮き彫りにするためである。

4. 展望

会議の決議を受けて、テオドシオス2世は特別な法令を発、その中でフラヴィアノス、エウセビオス、ドムノス、テオドレトスはネストリオスの異端で弾劾され、彼らに同調する司教の追放が命じられている¹⁹⁰。また、ディオスコロスに宛てた勅令は、彼の議長としての務めに感謝を表すと共に、コンスタンティノポリスとアンティオケイアの司教人事を含めた決議実施の監督権を彼に与

¹⁸⁶ FLEMMING 131:49-147:33.

¹⁸⁷ FLEMMING 147:35-36.

¹⁸⁸ FLEMMING 147:37.

¹⁸⁹ FLEMMING 147:41-151:21. 排斥の個別宣告と集団宣告との間には写本の欠損がある中で、前者の総数は正確にわからない。

¹⁹⁰ ACO II, 3, 2, p. 88:14-89:24.

えている¹⁹¹。こうしてアレクサンドリア教区の首都駐在使節を務めていたアナトリオスがコンスタンティノポリスの司教になり、アンティオケイアではマクシモスがドムノスの後任となった¹⁹²。また、エデッサではノンノスがイバスの後を継いだが、テオドレトスとエウセビオスの後継者が選任されなかったのは、どちらもレオ1世への上訴のため早くもローマへ逃れていたからである¹⁹³。実際にその時点では教会の行政に関して、帝国政府とディオスコロスに抵抗しえたのは、レオ1世しか残っていなかった。

こうした中、主要司教座から同僚に送られることになっていた就任のあいさつはレオ1世にとっては強い武器となった。アナトリオスから就任のあいさつが届いたとき、レオ1世はアナトリオスには直接返答せず、皇帝に改めてイタリアへの公会議召集を要請し、その席でネストリオスに加えてエウテケスも破門されるべきだ、と提言した¹⁹⁴。もちろん、その要請の含意は、皇帝による公会議への召集がなければ、教皇による首都の新しい司教の承認もあり得ない、ということである。

450年の夏までにフラヴィアノスが死去したことは確かになっていた。そのため、レオ1世には妥協のための余裕もでき、7月16日付の書簡では、アナトリオスの承認をめぐる条件整備のため使節を派遣することが皇帝に知らされた¹⁹⁵。ところが、使節がコンスタンティノポリスに向かう途中、冒頭に述べた落馬事故が起こったため、政権が変わる結果となった。教会会議は10月21日に開かれ、教皇使節も出席した¹⁹⁶。『フラヴィアノスへの書簡』が読み上げられた後、アナトリオスははじめ出席していた司教、聖職者は一人ずつ賛同を表明し、

¹⁹¹ FLEMMING 150-155.

¹⁹² ACO II, 5, p. 118:29-32.

¹⁹³ SC 111, 56:1-66:22.

¹⁹⁴ ACO II, 4, p.30:21-31:26.

¹⁹⁵ ACO II, 4, p. 30:21-31:36.

¹⁹⁶ シリア語で書かれた断章はラテン語訳と共に出版されている (P. MOUTERDE, "Fragment d'actes d'un synode tenu à Constantinople en 450." *Mélanges de l'Université saint Joseph*, Beyrouth 15 [1930/31] 35-50)。

教皇が求めたとおり、ネストリオスとエウテュケスの両方の破門を宣言した¹⁹⁷。その後、教皇使節はフラヴィアノスとエウセビオスの役割を肯定的に評価する文書を読み上げ、これが『フラヴィアノスへの書簡』と共に正式資料に収められた。

前政権のキリスト単性論への偏りに批判的であった世論に向けて、変革を印象付けるため、フラヴィアノスの遺骨は首都に移された¹⁹⁸。また、原点に立ち返ろうとの意気込みを訴えるため、451年3月23日の勅令で、同年9月1日の開会予定でニカイアに公会議が召集され、皇帝自らも参加する旨が公表された¹⁹⁹。

召集令どおりに東方各地の司教はニカイアに集まったが、西方キリスト教世界の代表は三名の教皇使節と北アフリカから避難してきていた二名の司教に限られていた。ところが、現在のブルガリアに当たる帝国領に野蛮族の侵攻が広がっていたので、皇帝は首都を離れることができなくなり、そのため、9月末、会場はコンスタンティノポリスに面するボスポラス海峡対岸のカルケドンに移されたのである²⁰⁰。

¹⁹⁷ Ibid. 46-48.

¹⁹⁸ ACO II, 3, 1, p. 19:14-18.

¹⁹⁹ ACO II, 3, 1, p. 19:25-20:8.

²⁰⁰ ACO II, 1, 1, p. 28:12:29:3 (ACO II, 3, 1, p. 22:3-22; ACP II, 2, 2 p. 4:3-20).

